

## 資料A：「子どものわがまはNO！」

幼児期（2～5歳）の子どもたちは、非常に自己中心性の高い段階です。周りの人たちのことやその時々状況を考えずに、自分の欲求を中心に行動する傾向が強いです。

そのような子どもに対して「子どもらしい」とか「のびのび育ててくれればいい」と思う親もいるかもしれませんが、これは大変危険なことです。近年、学力のように数値で評価できるような「認知的能力」ではなく、より内面的な、数値で評価できにくい「非認知能力」が注目されています。その中には「自制心」、つまりは自己中心的な欲求に従うのではなく、しっかりと自分自身をコントロールし、ガマンするときにはガマンできる力も位置づけられています。

この自制心は、大人になってから身に付けられるものではありません。幼児期の自己中心的な時期だからこそ、一つひとつをガマンし、抑えられるように大人が教えてあげなければなりません。したがって、厳しいかもしれませんが、子どものわがまに対して毅然とNO！を出し、できる限りガマンする経験をさせてあげましょう。

切りはなす

## 資料B「子どものわがまは受け入れよう！」

幼児期（2～5歳）の子どもたちは、非常に自己中心性の高い段階です。周りの人たちのことやその時々状況を考えずに、自分の欲求を中心に行動する傾向が強いです。

そのような子どもに対して「あれはダメ」「これもダメ」などとNOを出してガマンを強いるような関わりはおススメできません。よほど反社会的な行動でなければ、できるだけ子どものわがまを受け入れてあげてほしいものです。というのも、大人が一方向的にわがまをとらえていることは、実は子どもにとって願いであり要望だからです。「子どもの権利条約」第12条にある意見表明権がまさにこれです。そして、幼児期にこの願いや要望をしっかりと受け入れてもらった経験ができた子どもは、幼児期以降になって、今度は他者の願いや要望を受け入れることができるようになります。

ガマンを強いられるマイナスの経験ではなく、受け入れてもらったプラスの経験こそが「経験の連鎖」をつくり出すわけです。したがって、甘やかしと思われるかもしれませんが、子どものわがまはできる限り受け入れてあげましょう。